

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和四年八月六日(土曜日) 午後五開演

狂言 鐘の音(かねのね)

主人は成人した息子に小金作りの太刀を贈るため、太郎冠者を鎌倉へ遣わして金の値を調べさせます。太郎冠者は鐘の音を聞く用と誤解して、寿福寺・円覚寺・極楽寺・建長寺と、諸寺の鐘を撞き音を聞いて回ります。その結果を報告した太郎冠者はもちろん主人に叱られます。口答えして追い出された太郎冠者は、寺巡りを謡に作って主人の機嫌を直そうとしますが、かえって機嫌を損ねます。太郎冠者が寺ごとに違う鐘の音の音を口真似でみごとにまね分け、自ら聞き入る姿を見どころとします。

能 鉄輪(かなわ)

夜な夜な貴船の宮に参り、夫の裏切りに報復したいと祈る女(前シテ)がいます。男心の偽りを知らず、契りを込めた悔しさに苦しんでいます。女は通い慣れた夜の鞍馬道を急ぎ、到着した貴船の宮では、社人(アイ)から「鬼になりたければ足に火を灯した鉄輪を髪に戴き、怒る心を持って」という御神託を告げられます。人違いですとしらを切っても、夢想のとおりになると覚悟を決めると、女は早くも髪を逆立てて恨みの鬼と変じた様子です(中入)。その頃、下京辺に住む夫(ワキツレ)は最近悪い夢を見続けて不安になります。夢占いで知られる清明(ワキ)宅を訪れ、相談することになります。清明は一目見て、貴殿は女の恨みを深く蒙り、今夜のうちにも命が危ないと判じます。夫は本妻を離別し、新しい妻を迎えたことかと思ひ当たり、清明に祈禱を頼みます。清明は高棚に茅の人形(烏帽子と鬘)を置き、供物を調べて一心不乱に祈り続けます。そこへ風雲急を告げて、恐ろしい鉄輪の赤鬼(後シテ)が現れます。鬼女は笞を手に形代を見据えて、夫の心変わりをひとしきり恨みます。後妻(鬘)を打擲し、夫(烏帽子)を拉致しようとしたその時、御幣にいます三十番神に阻まれ、弱々しく再来を期して姿を消します。(西村 聡)

前シテ(女)

面(鉄輪女又は曲見) 鬘 鬘帯 箔 腰巻縫箔 腰帯 唐織壺
織扇 笠

後シテ(前シテ同)

面(生成又は橋姫) 鉄輪 鬘 鬘帯 箔 腰巻縫箔 腰帯 打杖